



職業・家庭科の批判

長谷川 淳

この数年來職業教育という言葉のほかに、一方においては「生産教育」あるいは「生産主義教育」という言葉（宮原誠一氏）および最近では「生産者のための教育」という言葉（平湯一仁氏）がいわれ、また他の一方においては「産業教育」という言葉（文部省産業教育振興法）が言われて来ている。これらの言葉は、その含む内容もその教育の目的も一様ではないが、それぞれの立場から職業教育という言葉につきまとう旧い観念をぬぐい去り、新しい意味の職業教育をうちたてようとする意図の一つのあらわれである。ことに中学校における職業・家庭科の教育は、義務教育としての普通教育であつて職業教育ではない。従つて、この教科の名称にあらわれているような、職業教育であることの示威を含むような名称と内容を改めて、普通教育としての内容をもつた別の名称が当然生れて来なければならない。

この職業・家庭科は、職業家庭科ではなく職業ポツ家庭科であり、そのように

発音することが約束されている。これを教育の現場では一般に「職業」とも略称され、また別の処では単に「ポツ」と呼ばれている。あるいはまた濁つて、ポツとも呼ぶ。私はこのポツという呼びが好きである。いかにも内容の雑然としたゴタゴタした感じをよくあらわしているからである。「図工」という略称も少し奇抜な感じをもたれるが、図画工作科は、を含まない一つの教科である。職業・家庭科はその成立の時に、職業と家庭は不即であると共に不離であり、平等の機会と権利をもつて、結合して並列するという「民主的な」合議によつて決められたものである。

戦後教科課程の改造がおこなわれた際に、それぞれの立場から、普通教科のほかに何かしら欠けているものがあることが意識されていた。戦前の実業科——農業工業商業水産——に相当するものを置くべきであること、あるいは、特定の職業への準備をするのではなく広く職業全般への理解を与える教科をおくべきこと

と、または、なにか身体を動かして働くようなものをおくべきこと、あるいは勤労愛好の精神を養うような教科をおくべきこと、その他のいろいろな主張が、この残された教科に集中し、かくして成立した都合世帯がこの教科である。それぞれの職域代表がそれぞれの分野から教材を等分に持ち寄り、また互に他を牽制し、互的に牽制すると共に質的にも牽制し——自然科学的原理は理科でやるべきであり、社会科学の知識は社科でやるべきであるというように——「多様な」仕事」だけが残された。この雑多な仕事をいかに処理すべきか、これを教養する方法として、ひそかに持ちこまれたのが、「単元学習」である。この職業・家庭科に相当するアメリカのインダストリアル・アーツではこのような「単元学習」を行つていないことを知つて、これはあくまでも日本の方法であり「世界にその顔を見ない」方法であると宣伝され、アメリカの一部の社会で採つている方法を密かに輸入した。そしてこの教科は「実生活に役立つ仕事」の学習であり、「生活技術」の学習であるとされた。

最近あらゆる面において再検討がおこなわれ、また逆コースの方向に進みつつある。しかし職業・家庭科の単元学習はまだ衰えを見せていない。しかしこれはどうやら方向を同じくしているか、あるいは、逆まわりの回転をしているものらしい。

次に現在一般におこなわれている単元学習や単元の構成の事例を示そう。いま一つを挙げる。これが栽培の学習。煮る、調理の学習。食う、食べ方や作法の学習。入れておく箱をつくる、これが工作の学習。余つたものを売ると、これが商業の学習。これが「いもはどのように入間に役立つか」という単元である。商業の単元では、販売には宣伝広告が必要であるそれにはいろいろな方法がある。ポスターによるものもあれば、直接連呼するものもある。そのためには自転車が必要である。自転車の分解組立を学習する。私はこんなものを見ると、「北風が吹けば掃屋が繁昌する」という話を思ひ出す。ある研究会で、「単元構成」をやつていゝるのに遭遇した。縦横に線をひき縦の欄には単元名を横の欄には仕事の項目を書き、参会の先生は手に手に、仕事の例を記入して小さいカードをもち、そのカードを適宜の位置にならべて居た。批評を求められたので、「くしやみをする」と飛ぶから、くしやみをしないように」と答えた。

ある学校の公開授業を参観した。自転車の分解修理をやつていた。ねじ回しの先がつぶれたので、手回しのグラインダーで研いでいた。手の力の弱い生徒には回連が速いためねじ回しが遅いのでよく研げなかつた。ある参観の先生がグラインダーを逆に回すことを暗示した。逆に回した効力が逆にかかり、ねじまわしが台の上で安定し、きれいに研ぎ上つて生

徒が喜んでいて、指導の教師も何も言わなかつた。中学校の職業・家庭科の仕事は、うまく要領よく出来させればよいのだ。もしねじ回しでなく刃物だつたらどんなことになつたであろうか。刃がこぼれたり、あるいは悪くすると怪我をすることももある。もしうまく研げなくても研ぎ方と同時に衛生看護も同時に学べる「単元学習」ができるのである。同じ学校で女子の実習室を見た。ミシンのカバーをとつてアームを持ち上げようとした。おどろいたことには、黒い塗料の塗つてあるところまで、べつと油がついていて、「金属品には——たとえ塗料が塗つてあるところでも、一時間後にまた使うにしても——必ず油を塗る」という仕事を命じてあつたのかも知れない。この機械を使う時に余程よく油をふき取らないと、裁ほうと洗濯を同時に学習できる「単元学習」をすることになる。

この一二の例でも明らかのように、目的の不明確な雑多な仕事を何らかの方法でまとまりをもたせようという目的だけでなく、すでに雑多な仕事を持ちこんでくる目的がかくされているのである。それは「生活技術」の学習であり、「実生活に役立つ仕事」の学習である、それは将来の産業社会の建設に役立つたせるものでもない。それは現在の産業社会や家庭生活における非合理的なものをも含んだ実生活に役立つ仕事を、「そ

の重要さを理解」したり、その「理解を深め」たりしながら、遂行させることがその目的である。そこで、自然科学的な技術を高めるのではなく、社会科学的な批判的精神を養うのでもなく、それらの仕事を、「勤労を重んじ、楽しく働く態度」をもつて、先人が経験した経験を、「発達段階に応じて」経験して行くのである。

このようなものとしてその目的が明確になつてくると、「職業・家庭科」という名称が不適当になつてくる。「労働科」「生産科」はどうだろうか。否、それはわが職業・家庭科がめざす目的とは目的が違ふし、第一どこかの国の匂がすると言われる。「勤労科」或は「労作科」がよいかも知れない。プロンスキーのは労働学校であるが、ケルシェンシュタインのは労作学校または勤労学校と言ふのが普通であるから、と言ふことも言われる。諸外国においても日本においても旧くからあつた教科ではなく、戦後の日本に始めて生れた教科であるから、新しい名称がよい。「生活技術科」はどうだろうか。そして最後に「実務科」などという珍妙な名称まで飛び出す。

どんな名称を持ち来つても、どんな整つた単元構成をやつてみても、現状の問題解決には何の役にも立たない。ある県の指導主事の言つたように、「生徒はカリキュラムを超越して生き生きと作業」しているし、教員養成大学は職業科の教員養成を放棄している。もしこのような

学習内容や方法が役だつていゝるとすればある特定の地域で、ある特定の産業部門で、その産業の発展や分化の程度がおくれ、その経営の形態の中にも、それを支えている社会生活の中にも封建的な遺制が色濃く残存しているような所で、その産業や社会生活の発展よりも、その現状の維持に貢献させようとする目的に役立っている。ホーム・プロジェクトとして農村や家庭のお手伝いという形で、脈をかつくことそれ自体、子守をすることそれ自体として行われていることが、このことにつながるものである。そしてこれらが各種のクラブや運動という形をとつて補強され益々隆盛をきわめている。

このような学習の形態をとつている職業科の教育は、先進資本主義国にも社会主義国にもない。これまでの職業教育の歴史を見れば、社会の発展期においては教科の分化がおこなわれ、逆に社会の安定期、後退期においては、教科の統合が行われて来たと言つてよい。それぞれの社会的利用形態はともかく、諸外国の職業教育において現在一般にとられている方法は、社会の発展期に準えた方法である、もし分化以前のものに逆行させることも統合と呼ぶならば、現在の職業・家庭科の方法は社会の安定期後退期にふさわしい方法である。

戦後の職業・家庭科教育の効果がよくやく表面にあらわれた時期と同じ頃に、別の角度から日本の産業の振興が叫

ばれるようになった。全卒業生の八割が直ちに実社会に出る現状においては、中学生に何らかの職業的教育を興える必要があることが言われた。そして「産業教育振興法」が制定され、その中に中学校の職業・家庭科も含まれている。ここに職業・家庭科も「産業教育」という新な名称で呼ばれるようになった。しかしこの名称の變つたことは、この教科の内容や方法の改善にはあまり役立たないものであることは、この法律に対する批判を見ればわかる。それはただ勤労愛好の精神の代りに、職業的訓練をもつてつてもよいだろうという安心感や暗黙の了解を興えるにすぎないものである。この二つは窮極においては同じものである。り、バズーカ砲と原子砲の差のようなものである。ここに、このいづれでもない教育が、新しい名称をもつて生れて来なければならない理由がある。

増田三良 著

國語指導の基本問題

1 言語の意義 2 言語習得の過程 3 言語のはたらきと社会 4 記号としての言語 5 各論 6 國語教育の論争 7 言語指導の方法

△ 5判 370頁 300円 下 35円

東京 誠文堂新光社 神田